

大学内子育て支援施設の役割と課題 —地域利用者からの声をもとに—

森下 葉子*・加須屋 裕子*・椛島 香代*・小栗 俊之*・
金子 智栄子*・柄田 毅*・鳩山 多加子*

本稿は、本学保育実践研究センター（ふらっと文京）において毎年行ってきた利用者に対するアンケート調査の2010年度から2014年度のデータの分析を通して、大学内にある子育て支援施設の役割や課題について検討することを目的とした。利用状況及び利用満足度の年度推移を検討したところ、大きな変化は認められなかったが、唯一、職員の対応について2010年度よりも2013年度、2014年度の満足度が高くなっていった。また、利用状況と子ども数や登録児数の関連については、子どもの数が多いと昼食以降の時間帯に短時間利用するパターンが多いことが示唆された。大学運営の子育て支援施設に求める内容については、他の子育て支援センター等子育て支援施設に期待する内容と同様に、親子で遊べる空間や他の親子との出会いや交流などであった。利用者のニーズに応えながらも、乳幼児期にふさわしい生活や子どもの発達過程についていかに伝えるかが今後の課題として残された。

Key words : 子育て支援, 乳幼児, 利用満足度

I. 目的

現在、0～2歳児のおよそ7割が家庭で過ごしている（厚生労働省、2016）。子どもの心身の発達にとって重要なこの時期に、保護者が安定した心身の下、主体的に育児を営むことが望まれる。

松田（2010）は、子育て基盤として、就労・経済基盤、地域社会、社会的な子育て支援の3つをあげている。不況や地域コミュニティの希薄化が課題となっている今、子育て支援への期待は大きい。1994年に策定されたエンゼルプラン以降、わが国では様々な子育て支援施策が打ち出され、子育て支援の場は子育て支援センターや保育所・幼稚園にとどまらず、拡大してきた。保育者養成

校においても学内外で子育て支援事業を行っている大学（短大）もあり、未来の保育を担う学生の学びの場としての効果が報告されている（梶浦・鍛冶・清水、2006；須永、2008）。

こうした中、本学では、2005年に保育実践研究センター「ふらっと文京」（以下ふらっと文京）が開設された。開設以来11年間、ふらっと文京は、大学の授業がある期間に週3回、9時半から14時半の間に地域の0～2歳児とその保護者を対象に開所しており、その時間帯は入退室自由である。0～2歳の発達に適した厳選された玩具や大型遊具が備えられ、自由に利用することができる。保育指導職員もしくは保育補助スタッフと呼ばれる職員が常駐している。親子のかかわりを保証すべく、スタッフは積極的に親子にかかわるの

*人間学部児童発達学科

ではなく「見守り」が基本体制となっている。

エンゼルプランの策定から約20年経ち、支援の場や施設が増える一方、支援の中身、つまり質について改めて見直す必要性が高まっている（中谷，2008）。2010年度より年末年始にかけて利用者を対象に利用に関するアンケートを実施し、毎年度の活動の振り返りに生かしてきた。本稿では、地域利用者を対象にした子育て支援施設に対するニーズや満足度について、調査を開始した2010年度から2014年度のデータをもとにこの5年間の利用者のニーズや満足度の変化を捉え、大学が運営する子育て支援施設の在り方について検討することを目的とする。

II. 方法

ふらっと文京を利用する保護者を対象に質問紙調査を実施した。調査は2010年度から2014年度の各年度11月中旬頃から1月末にかけて、ふらっと文京の保育スタッフが、来所した保護者に対して個別に協力依頼した。承諾を得られた保護者には、その場での回答、提出を求めた。依頼の際、調査結果や個人情報の取り扱いについて説明し、倫理面への配慮に努めた。また、保護者が回答している間はスタッフが子どもと遊ぶ等、子どもの安全の確保に努めた。

調査内容は以下のとおりである。

《調査協力者の属性》子どもとの続柄、自身の年齢範囲、子どもの数と年齢・性別、現在の登録の有無、過去の利用の有無等について尋ねた。

《子育てについて相談する相手》夫／妻、自分の母親、わが子とほぼ同年齢の子どもをもつ友達、保健師や医師などの医療系の専門職を含む10項目の選択肢から複数回答を求めた。

《大学が運営する子育て支援施設に求めること》大学が運営する子育て支援施設にどのようなことを求めるかについて、「親子が一緒に遊ぶ空間があること」、「我が子が他の子と出会い、遊べること」、「専門家による子どもの発達や教育、子育てについての相談」等の11の選択肢から3つ選ぶよう求めた。

《利用状況》当該年度の利用状況として、利用

頻度、利用時間帯、およその利用時間について、各選択肢の中から1つ選択するよう求めた。利用時間帯については最も多いパターンを選択するよう求めた。

《利用満足度》ふらっと文京の空間、遊具の質・種類、遊具の数、開所日、時間帯、職員の対応の6項目について、「1：不満」、「2：少し不満」、「3：やや満足」、「4：満足」、「5：とても満足」の5件法で尋ねた。また、各項目の評価理由を必要に応じて記述するよう求めた。

《本施設への意見や要望》本施設への意見や要望について自由記述するよう求めた。

上記のほか、本調査では、学生とのかかわりや学生の学びへの協力についての意見、子育て講座について、教員の研究協力に対する意見についても尋ねているが、これらの分析については本稿では扱わず、上記6つの問いに対する回答を分析対象とする。

III. 結果

1) 調査協力者の属性

各年度の協力者数および属性は、表1の通りである。毎年45名前後から協力を得た。協力者の年齢範囲は、2010年度から2012年度は31～34歳が最も多く、2013年度および2014年度は35～40歳が最も多かった。いずれの年度も30代が中心であった。子どもの数は1人が多く、初めて子育てをしている利用者が毎年半数以上を占めていることが分かる。子どもが複数いる利用者の中には、子どもを2人連れてきている利用者もいれば、ふらっと文京を卒業し幼稚園や小学校に通っている利用者もいる。

なお、協力者の多くは母親であった。2013年度、2014年度には父親が1名ずつ含まれていたが、父母間で違いがある日頃の育児関与の実態や育児に伴う心理状況等に触れる内容は扱っていないため、本稿では調査協力者の続柄を区別せず分析することとした（表1）。

表 1 各年度の協力者の属性

		2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
協力者数		45	42	43	44	42
年齢範囲	24歳以下	0	0	1	0	0
	25～30歳	11	15	7	9	5
	31～34歳	19	18	18	11	15
	35～40歳	15	7	15	22	19
	41～44歳	0	2	2	2	3
子どもの数	1人	33	29	33	27	32
	2人	11	12	9	11	8
	3人	1	1	1	5	2
登録児数	1人	43	36	41	37	34
	2人	2	6	2	7	8
第1子の月齢平均 (下段:SD)		26.8 (19.73)	23.7 (17.28)	28.7 (26.46)	32.3 (33.43)	27.0 (19.15)

2) 利用状況, 満足度, 大学が運営する子育て支援施設に求めることの推移

①利用状況の年次推移

各年度の利用頻度の度数分布を表2に示す。いずれの年度も月に2～3回の利用が最も多く、次いで月に1回、ほぼ毎週1回の順に多かった。年度と利用頻度に関連が見られるか χ^2 検定を行ったところ有意な関連は認められなかった($\chi^2(16)=17.17, n.s.$)。利用時間帯についても年度との間に有意な関連は認められなかった($\chi^2(16)=16.64, n.s.$)。いずれの年度も「午前+昼食+午後」の利用が最も多く、「午前のみ」や「午後のみ」は比較的少なかった(表3参照)。2014年度は「昼食+午後」が0名だった一方、午後のみ利用者の割合が他の年度に比べて多く、14.29%(6名)を占めた。利用時間は、どの年度も2～3時間が最も多く、3～4時間の利用が2番目に多かった(表4参照)。利用時間についても年度と有意な関連は認められなかった($\chi^2(12)=6.60, n.s.$)。

②利用満足度の年次推移

図1は、空間や遊具の質等、施設の利用満足度の平均値を年度ごとに算出し、グラフに示したものである。空間、遊具の質・種類、遊具の数は各年4.6～4.9と高い値で横ばいであった。一方で、開所日及び時間帯はどの年も他の項目に比べて満

足度が低かった。これらの満足度について年度間に差があるかを検討するため、年度(2010～2014年度)を独立変数、施設利用の満足度(空間、遊具の質・種類、遊具の数、開所日、時間帯、職員の対応)を従属変数として一元配置の分散分析を行った。その結果、職員の対応に対する満足度において有意差が認められた($F(4,210)=3.70, p<.01$)。Tukey法による多重比較を行ったところ、2010年度よりも2013年度及び2014年度の満足度が5%水準で有意に高かった。また、空間に対する満足度については有意傾向が認められた($F(4,210)=2.00, p<.10$)が、下位検定では年度間に有意差はみられなかった(図1)。

③利用状況と利用満足度との関連

利用状況と施設利用の満足度との関連を検討するため、利用頻度、利用時間帯、利用時間を独立変数、施設利用の満足度を従属変数とする一元配置の分散分析を行った。さらに有意差がみられたものについてはTukey法による多重比較を行った。

遊具の数の満足度については、利用頻度との間に有意傾向が認められた($F(4,210)=2.16, p<.10$)が、多重比較では有意差は認められなかった。開所時間帯に対する満足度は、利用時間帯で有意差がみられ($F(4,209)=3.76, p<.01$)、多重比較の結果、「午前+昼食+午後」の利用者の方が「昼食

表2 各年の利用頻度の度数分布

度数 (%)

	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
ほぼ毎週2～3回	4 (8.89)	7 (16.67)	3 (6.98)	1 (2.27)	5 (9.26)
ほぼ毎週1回	9 (20.00)	7 (16.67)	6 (13.95)	6 (13.64)	4 (9.52)
月に2～3回	17 (37.78)	18 (42.86)	21 (48.84)	23 (52.27)	13 (30.95)
月に1回	10 (22.22)	7 (16.67)	9 (20.93)	8 (18.18)	10 (23.81)
その他	5 (11.11)	3 (7.14)	3 (6.98)	3 (13.64)	10 (23.81)
無回答	0 (0.00)	0 (0.00)	1 (2.33)	0 (0.00)	0 (0.00)

表3 各年の利用時間帯の度数分布

度数 (%)

	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
午前のみ	3 (6.67)	5 (11.90)	4 (9.30)	5 (11.36)	4 (9.52)
午前+昼食	6 (13.33)	8 (19.05)	7 (16.28)	7 (15.91)	7 (16.67)
午前+昼食+午後	28 (62.22)	19 (45.24)	21 (48.84)	25 (56.82)	25 (59.52)
昼食+午後	6 (13.33)	7 (16.67)	8 (18.60)	2 (4.55)	0 (0.00)
午後のみ	2 (4.44)	3 (7.14)	2 (4.65)	4 (9.09)	6 (14.29)
無回答	0 (0.00)	0 (0.00)	1 (2.33)	1 (2.27)	0 (0.00)

表4 各年の利用時間の度数分布

度数 (%)

	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
1時間以内	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
1～2時間	8 (17.78)	8 (19.05)	13 (30.23)	10 (22.73)	9 (21.43)
2～3時間	24 (53.33)	20 (47.62)	14 (32.56)	18 (40.91)	18 (42.86)
3～4時間	11 (24.44)	10 (23.81)	14 (32.56)	12 (27.27)	12 (28.57)
4時間以上	1 (2.22)	3 (7.14)	2 (4.65)	1 (2.27)	2 (4.76)
無回答	1 (2.22)	1 (2.38)	0 (0.00)	3 (6.82)	1 (2.38)

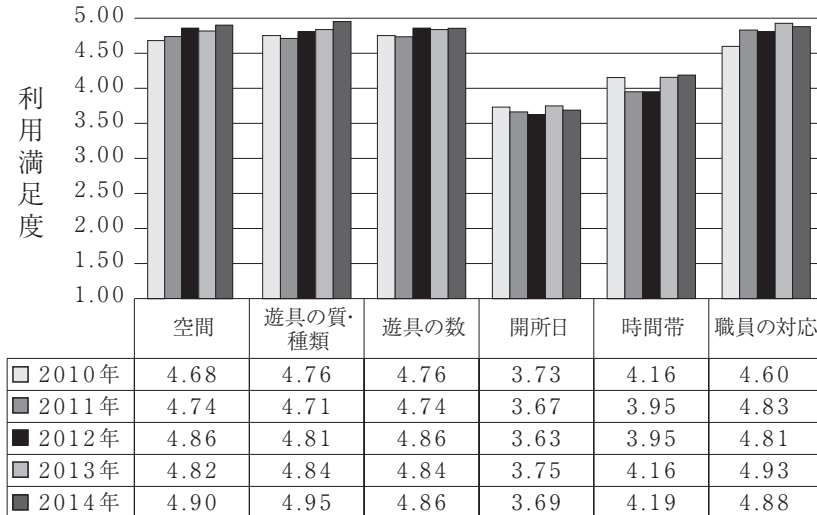


図1 利用満足度の年次比較

+午後」や「午後のみ」の利用者より開所時間帯に対する満足度が高かった。さらに、開所時間帯の満足度は、利用時間においても有意差がみられ ($F(3,206)=3.811, p<.05$)、多重比較の結果、「2～3時間」や「3～4時間」の利用者の方が「1～2時間」の利用者よりも開所時間帯に対する満足度が高かった。

こうした利用状況は利用者のどのような特性と関連があるのだろうか。子ども数と登録児数それぞれについて利用状況の度数分布を表5にまとめた。利用状況と子ども数との関連を調べるために χ^2 検定を行った。子どもの数は利用頻度と有意傾向 ($\chi^2(8)=15.01, p<.10$)、利用時間帯と有意差が認められた ($\chi^2(8)=25.42, p<.01$)。残差分析の結果、利用頻度については、ほぼ毎週1回の利用は、子ども1人が多く、2人が少ないこと、子どもが2人の場合は、月に2～3回の利用が多いことが示された。利用時間帯については、午前+昼食の利用は子どもが3人いる場合に多く、子どもが2人いる場合は少なかった。利用状況と登録児数との関連についても同様に χ^2 検定を行ったところ、利用時間帯に関連が認められた ($\chi^2(4)=17.72, p<.01$)。残差分析の結果、子ども1名を登録している人で午後のみ利用が少ないことが示された。

空間、遊具の質・種類、遊具の数、開所日、職員の対応の満足度については、利用状況による有意差は認められなかった。

3) 大学が運営する子育て支援施設に求めること

①大学運営の子育て支援施設に求めることの年次推移

大学が運営する子育て支援施設に求めることとして11の選択肢から3つ選択するよう求め、各項目の選択数を年度ごとに集計した(表6参照)。各年度内で最も多く選択された項目、2番目に多く選択された項目、3番目に多く選択された項目を網掛けで表した。どの年度においても「親子が一緒に遊ぶ空間があること」、「我が子が他の子と出会い、遊ぶこと」、「家庭にはないおもちゃや絵本で遊ぶこと」を多くの利用者が選択していた。

2013年度のみ「専門家による子どもの発達や教育、子育てについての相談」が3番目に多く選択されていた。この項目の選択・非選択について、年度間に関連が見られるか χ^2 検定を行った結果、有意に関連することが示された ($\chi^2(4)=11.22, p<.05$)。残差分析を行ったところ、2013年度にこの項目を選択した利用者が多かったことが示され

表5 利用状況と子ども数、登録児数との関連

上段：度数 下段：調整済み残差

	子どもの数			登録児数	
	1人	2人	3人	1人	2人
利用頻度					
ほぼ毎週2～3回	17	3	0	18	2
	1.4	-9	-1.0	.2	-2
ほぼ毎週1回	29	2	0	31	1
	2.9	-2.4	-1.3	1.6	-1.6
月に2～3回	60	28	4	78	13
	-1.9	2.1	-2	-1.4	1.4
月に1回	31	10	3	38	6
	-2	-1	.8	-5	.5
その他	17	7	3	25	2
	-1.1	.3	1.7	.7	-7
利用時間帯					
午前のみ	16	4	0	20	1
	.8	-4	-1.0	1.0	-1.0
午前+昼食	27	2	6	33	2
	.7	-2.7	4.2	1.2	-1.2
午前+昼食+午後	84	31	3	104	14
	-4	1.1	-1.4	-1	.1
午後+昼食	17	6	0	22	1
	.2	.3	-1.1	1.2	-1.2
午後のみ	10	7	0	10	7
	-1.3	1.8	-9	-3.9	3.9
利用時間					
1～2時間	36	11	1	42	6
	.5	-2	-9	-3	.3
2～3時間	67	22	5	84	10
	-2	-1	.7	.3	-3
3～4時間	42	14	3	51	8
	-1	.0	.4	-6	.6
4時間以上	6	3	0	9	0
	-4	.7	-6	1.1	-1.1

た。

他の項目についても、同様に χ^2 検定を行ったところ、「我が子以外の子どもを見たり、かかわったりできること」で有意な関連が認められた($\chi^2(4)=10.95, p<.05$)。残差分析の結果、この項目は2011年度に多く選択され、2013年度が少ないことが示された。

②大学運営の子育て支援施設に求めることと利用

状況、利用者の特性との関連

大学内にある子育て支援施設にどのようなことを求めるかは、利用状況や利用者の特性と関連があるのだろうか。利用状況との関連を調べるため χ^2 検定を行ったところ、「親同士がゆっくり話せる空間があること」と利用時間帯に有意な関連が認められた($\chi^2(4)=9.83, p<.05$)。残差分析の結果、この項目を選択した人は昼食を挟んで午前から午後まで利用するケースが多く、午前のみ利用する人

表6 大学が運営する子育て支援施設に求めることの年次比較

	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
1) 親子が一緒に遊ぶ空間があること	28 (19.58)	22 (17.05)	26 (20.80)	29 (22.14)	27 (19.42)
2) 親子が一緒に遊ぶ時間があること	8 (5.59)	3 (2.33)	5 (4.00)	6 (4.58)	11 (7.91)
3) 他の親と出会えること	11 (7.69)	13 (10.08)	8 (6.40)	8 (6.11)	11 (7.91)
4) 我が子が他の子と出会い、遊べる こと	27 (18.88)	30 (23.26)	29 (23.20)	29 (22.14)	27 (19.42)
5) 親同士がゆっくり話せる空間がある こと	6 (4.20)	7 (5.43)	4 (3.20)	7 (5.34)	9 (6.47)
6) 家庭にはないおもちゃや絵本で 遊べること	19 (13.29)	19 (14.73)	27 (21.60)	17 (12.98)	22 (15.83)
7) 専門家による子どもの発達や教育 についての最新の情報提供	13 (9.09)	8 (6.20)	11 (8.80)	8 (6.11)	9 (6.47)
8) 我が子以外の子どもを見たり、か かわったりできること	10 (6.99)	13 (10.08)	4 (3.20)	4 (3.05)	11 (7.91)
9) 専門家による子どもの発達や教育、 子育てについての相談	16 (11.19)	11 (8.53)	9 (7.20)	21 (16.03)	8 (5.76)
10) 他の親が子どもとかかわる様子 を見られること	4 (2.80)	2 (1.55)	2 (1.60)	2 (1.53)	4 (2.88)
11) その他	1 (0.70)	1 (0.78)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)

が少なかった。また、「我が子以外の子どもを見たり、かわったりできること」と利用時間にも有意な関連が認められ ($\chi^2(3)=12.65, p<.01$)、残差分析の結果、4時間以上利用する人が多かった。「他の親が子どもとかかわる様子を見られること」は利用頻度との間に有意な関連が認められ ($\chi^2(4)=27.96, p<.01$)、残差分析では、「他の親が子どもとかかわる様子を見られること」を選択した人は、ほぼ毎週2～3回、ほぼ毎週1回と利用頻度が多く、月に2～3回の利用は少なかった。

次に、利用者の特性との関連をみるために、子どもの数や登録児数との関連を χ^2 検定によって確かめた。「専門家による子どもの発達や教育についての最新の情報提供」と子どもの数に有意な関連が認められた ($\chi^2(2)=6.43, p<.05$)。残差分析により、この項目を選択した人は子どもが

1人の利用者が多く、2人は少ないことが示された。「我が子が他の子と出会い遊べること」と子どもの数にも有意な関連が認められたが ($\chi^2(2)=6.25, p<.05$)、残差分析をしたところ子ども数が2人いる利用者でこの項目を選択した人が多かった。さらに、この項目は登録児数とも関連が認められ ($\chi^2(1)=3.95, p<.05$)、残差分析の結果、子どもを2人登録している利用者の選択が多かった。

周囲に子育てサポート資源がどれだけ持っているかによっても子育て支援施設に求めることは異なるのではないかと。そこで、複数回答を求めた子育て相談をする相手について、その数を相談先数として合計し、平均値と標準偏差を基準に0以上4未満をサポート少群、4以上7未満を中間群、7以上をサポート多群の3群に分け、各項目について χ^2 検定を行ったが、いずれの項目でも有意

な関連は認められなかった。

IV. 考 察

ふらっと文京の利用者の利用状況やニーズについて過去5年分の利用者アンケートを再分析し、年次推移や利用状況、利用者の特性との関連について検討してきた。

利用状況については、年度間に大きな違いはみられなかった。利用頻度は月に2～3回がいずれの年も最も多かった。また、利用時間帯と利用時間の結果と合わせると、10時半から11時頃に来所し、昼食（11時半～12時20分）をはさみ、13時半頃退所するパターンが多いことが示された。この開所時間帯は0～3歳児の生活時間を考えて設定されており、開所以来変わっていない。昼食以降や午後以降に利用する人の開所時間への満足度が低いことが示された。また、長時間利用の人は短時間利用の人よりも開所時間への満足度が高いことも示された。開所時間への満足度への評価理由欄やふらっと文京への意見・要望欄に記載された記述をみると「15時まで伸ばしてほしい」「16時まで伸ばしてほしい」といった内容が多い。中には、「午前中は10時からでも良いので」といった記述が見られる。いずれも開所時間の延長を希望する声が毎年のように聞かれる。それでも時間帯を変更しないのは「子育て支援＝保護者のニーズに全て応えること」と考えていないからである。自由記述欄には「子どもが一番遊びたい時間帯なので（ちょうどいい）」や「夕方まであいていると家事にひびいてしまう」といった記述もみられる。子どもがその時期にふさわしい生活を保護者が整えられるよう今後も支援していきたい。

また、子どもの数や登録児の数によって利用時間帯に違いがみられた。幼稚園児や小学生の長子がいればその生活時間に応じて、早く帰らなければならないこともあるだろう。子どもを2人登録し連れてくるとなると、どちらかの体調や状態によって来られないこともあるだろう。子どもの数が多ければそれだけ外出に制限がかかることは容易に推測できる。子育て支援施設非利用者を対象にしたアンケート調査を行った香崎(2012)では、

ニーズや立地条件、対人関係などが現在の生活状況に合致していないことが、利用しなくなった要因となっていることが示された。本稿では、利用者の特性として子どもの数や登録児数、相談相手との関連を検討するに留まった。通所のための交通手段やかかる時間などについても調査し、利用状況との関連を検討することは今後の課題である。

大学運営の子育て支援施設に求めることについては、どの年度においても親子がゆったりとした空間で遊べることや、子ども同士が交流できること、おもちゃや絵本など豊かな環境が、多くの利用者から求められていた。特に、保護者自身あるいは子どもと他者（児）との交流と利用時間や頻度に関連がみられたことから、他者との交流を目的に利用している人ほど頻繁に、また、長時間利用することが示唆された。児童館等の子育て支援施設の来館理由を調査した正田・佐藤（2016）でも、来館理由の上位に「親子ともに様々な人と交流できる」があげられており、親子で孤立しやすい乳幼児を育てる保護者にとって他者との交流は、運営主体の特性を超えて、子育て支援施設を利用する目的となっていることがうかがえる。大学運営の子育て支援施設として、専門家による子育て相談や最新の情報提供が考えられたが、これらについては専門家による最新情報の提供と子どもの数との関連が示された。中谷（2008）によると、子育て不安の高低によって求める支援が異なり、不安が高い母親ほど遊び場や託児、情報誌など多くの人が集う場や間接的な支援を求めており、不安が低い母親ほど親子教室や育児相談、子育て講演会など経験的で集中的な支援を求めるといった特徴が示されている。安藤・荒巻・岩藤・丹羽・砂上・堀越（2008）においても、子育て負担感の高い保護者は幼稚園の預かり保育の利用が多い反面、子育て相談の利用には消極的である傾向が示唆された。本調査では、子どもが1人の利用者に、子育てに関する最新の情報提供を求める人が多かった。1人目の子育ては分からないことが多い。また、インターネットで情報を得ることは容易だが、その情報に翻弄されてしまう場合も少なくない。子どもと保護者がリラックスした場面で、子どもの遊ぶ姿を共有しながら、保護者の

声に耳を傾け、必要に応じて助言や情報提供を気軽に行うことのできるふらっと文京の雰囲気は、初めて子育てを行う利用者にとって大きいのではないだろうか。

施設の利用満足度について年度間の比較をした結果、唯一、職員の対応に関して、年度間で有意差がみられた。2010年度よりも2013年度および2014年度の方が、職員に対する満足度が高かった。2010年度の「職員の対応」に対する満足度の評価理由として、「子どものケガを未然に防ぐ為とは分かっているのですが、若干注意が多いかな…」や「以前よりこまかくなった。少し厳しくなったように思う」という記述がみられた。平成22年度保育実践研究センター事業報告書によると、2010年度はスタッフの人数を増加した年であった。具体的には、保育補助が2名増え、担当曜日に1名ずつ入ることになり、保育指導職員2名と合わせて計3名の保育スタッフがその日の保育にあたるようになった。スタッフ数が増加したことにより、子どもの安全に配慮しながら見守る体制をとりやすくなった一方で、人数が増えたことによりスタッフ間で利用者に対するかかわりについて相違が生じやすくなったためと推測される。2012年度の事業報告書では、日々の保育で見られた利用者の様子や保育の意見交換に加えて、問題や課題、ふらっと文京の保育方針や理念について、短時間勤務の保育補助との共通理解をどのように深めていくかが課題としてあげられている。そして2013年度に、スタッフ間の情報共有や共通理解を図るために、開所日以外に保育補助スタッフと保育指導職員のミーティングの場が設けられた。このミーティングはこれ以降定期的に行われている。こうした取り組みが職員の対応への満足度の向上につながったと考えられる。ふらっと文京の理念を体現し、利用者に伝えていくのは利用者と直接関わることの多い保育指導職員と保育補助スタッフである。両者の専門性や協働の在り方を明らかにしていくことは、保育園や幼稚園等の保育現場での教職員間の協働の在り方を考える上でも有用だろう。今後の課題としたい。

引用文献

- 安藤智子・荒巻美佐子・岩藤裕美・丹羽さかの・砂上史子・堀越紀香 (2008). 幼稚園児の母親の育児感情と抑うつ：子育て支援利用との関係, 保育学研究 46(2), 99-108.
- 梶浦真由美・鍛治紀美子・清水貴子 (2006). 保育者養成における子育て支援に関する研究 (1) — 学生のレポート分析を通して —, 北海道文教大学研究紀要 (30), 45-54.
- 厚生労働省 (2016). 平成 28 年度全国保育士養成セミナー行政説明資料.
- 香崎智郁代 (2012). 子育て支援施設非利用者の現状と支援の課題に関する一考—非利用者を対象にしたアンケートを参考に—, 社会関係研究 18(1), 19-45.
- 中谷奈津子 (2008). 地域子育て支援と母親のエンパワメント：内発的発展の可能性, 岡山：大学教育出版.
- 正田小百合・佐藤克志 (2016). 杉並区における子育て支援施設利用の実態と課題, 日本女子大学紀要家政学部 63, 27-35.
- 須永 進 (2008). 実践報告「子育て支援」の学習プログラムとその効果について, 藤女子大学紀要 45(第Ⅱ部), 51-59.

参考資料

- 文京学院大学保育実践研究センター (2011). 平成 22 年度事業報告書
- 文京学院大学保育実践研究センター (2012). 平成 23 年度事業報告書
- 文京学院大学保育実践研究センター (2013). 平成 24 年度事業報告書
- 文京学院大学保育実践研究センター (2014). 平成 25 年度事業報告書
- 文京学院大学保育実践研究センター (2015). 平成 26 年度事業報告書

(2016. 9. 28 受稿, 2016. 10. 14 受理)